



CIVIC FORCE

NEWS LETTER Vol.15

ニュースレター (July, 2018)



豪雨で浸水した岡山県倉敷市真備町の「まび記念病院」。患者が取り残されているとの情報を受けて、医師・看護師と救助犬、パイロットを含むレスキューチームを派遣（7月8日撮影）

【西日本豪雨支援】 寄付受付中！

■三井住友銀行 青山支店
普通 6977180

■ゆうちょ銀行 00140-6-361805
公益社団法人 Civic Force
(シャ シビックフォース)

※通信欄に、「西日本豪雨支援」とご記入ください。なお、様々なサポートをするためにご寄付のうち 15%は運営費として活用させていただきます。

■クレジットカード・電子マネー

https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation

【西日本豪雨】病院患者を救急搬送

茶色く濁った水に浸る建物や車、激しくえぐれた山肌、散乱する流木... 上空から見える景色は、日本列島を再び大きな災害が襲ったことを物語っていました。

2018年7月6日から停滞した梅雨前線の影響で「数十年に一度」と言われる記録的な大雨が降り、西日本を中心に大きな被害が発生しました。9日時点で亡くなった方は13府県で100人以上に及び、行方不明や連絡が取れない人が大勢います。避難所に身を寄せる人の数も日に日に増え、被害の全容はまだ明らかになっていません。

発災直後から情報収集を開始した Civic Force は、パートナー団体のアジアパシフィックアライアンス・ジャパン (A-PAD ジャパン) とピースウィンズ・ジャパン (PWJ) とともに緊急支援チームを結成しました。ヘリでの調査が可能となった7日には、上空から広島県や岡山県を中心に浸水地域を調査。翌8日に医師や看護師、救助犬、パイロットを含むレスキュー隊員を派遣して、倉敷市真備町の病院に取り残されていた患者全員をヘリやボートで救急搬送しました。同時に、避難所の巡回や物資配布の活動も開始しています。

今月のニュースレターでは、甚大な被害を受けた西日本大雨洪水支援の速報をお知らせします。また、1年前の九州北部豪雨の被災地支援活動や熊本地震のその後、東日本大震災「夢を応援プロジェクト」の奨学生や卒業生から寄せられたメッセージをご紹介します。

発行日：2018年7月
発行：公益社団法人 Civic Force
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-41-12
富ヶ谷小川ビル 2階
TEL：03-5790-9366
e-mail：info@civic-force.org
URL：http://www.civic-force.org

被災地 を 支援する

日本各地で発生する災害時の緊急支援活動や被災地の復旧・復興に向けた取り組みについてお知らせします。

西日本 豪雨

「搬送が遅れたら 患者の命が危なかった」

「患者全員を一刻も早く避難させてほしい」

西日本全体を襲った豪雨発生から 2 日後の 7 月 8 日、発災直後から待機していた緊急支援チーム（Civic Force / A-PAD ジャパン / PWJ）のもとに、岡山県倉敷市真備町にある「まび記念病院」の患者らが院内に取り残されているとの情報が入りました。水陸両用車で病院に駆けつけたチームは、院長の依頼を受けて、その場にいた患者全員約 50 人をゴムボートとヘリ 2 機、自衛隊の船で救急搬送しました。

なかでも緊急を要する重症患者 8 人は、看護師付き添いのもと、病院の屋上からヘリで岡山大学病院などへ搬送しました。これらの活動は、HuMA（災害人道医療支援会）や DMAT（災害派遣医療チーム）などの医療関係者や自衛隊と協力して行いましたが、今回は災害救助の経験豊富な稲葉基高医師がチームの一員として医療機関への搬送や引き継ぎを行いました。

稲葉医師は「患者の半数はねたきりで搬送が遅れたら命が危険な人もいた。2 機のヘリを何度も往復させ、なんとか全員を救出できて安堵しています」と話しています。搬送先の病院や患者の皆さんからも「これ以上遅くならなくてよかった」と安堵の声が届いています。

巡回診療を開始 食糧や下着、暑さ対策の物資を配布

真備町では避難所での巡回診療も開始したほか、各避難所へのニーズ調査を続けています。9 日には下着や靴下などの物資を岡田小学校など 4 つの避難所に届けました。その他、暑さ対策の物資など必要な支援を一刻も早く届けられるよう、各企業と協力しながら物資の調達に努めています。

また、広島や関西地域の被災地で調査を開始しているパートナー団体とも連絡をとり合い、今後長期化が予想される復旧・復興をサポートできるよう準備を進めています。



上空から撮影した岡山県の様子とヘリ・ボートでの救出活動の様子

発災から1年、「これからは自分たちの手で」

2017年7月の九州北部豪雨から1年が経ちました。前代未聞とも言われる大量の土砂や流木による被害を前に、復興に向けた道のりはまだ半ばです。Civic Force 九州北部豪雨支援「NPO パートナー協働事業」では、大分県日田市で活動する「ひちくボランティアセンター」へのサポートを通じて、地域の復旧・復興を後押ししています。

復興ウォーク開催

大分県日田市大鶴地区で3月末、「復興ウォーキング&春まつり」が開催され、地元住民や全国の観光客ら約270人が参加しました。日田市は、1300件近くの家屋が浸水や全壊・半壊などの被害を受けましたが、「全国からかけつけてくれた皆さんへの感謝の気持ちを伝えるとともに、ばらばらになってしまった住民の復興への思いを一つにしたい」と、地元の実行委員会によって開催されました。

なお、開催を支えたひちくボランティアセンターは、これまで家屋の泥出しなどボランティアの受け入れを通じて地域住民の生活再建をサポートしてき



ましたが、6月30日をもって作業ボランティアの受付を終了しました。「ひちく」代表で日田在住の江田泉さんは、「今までたくさん助けてもらった。災害が多い日本では発災直後に支援が必要な人が大勢いる。これからは私たちの経験を他地域で生かしたい」と話しています。

7月末、ご寄付の受付を終了します

2016年4月の熊本地震支援活動の指定寄付口座は、2018年7月末でご寄付の受付を終了します。2018年6月末現在で1億1717万円（運営費15%分含）のご寄付をお預かりし、被災地のニーズに合わせ、緊急支援・復興支援のために速やかに大切に活用しています。これまでご支援いただいた皆さまのご厚意に心より感謝申し上げます。なお、NPO パートナー協働事業では、6月20日、熊本地震の支援事業としては最後となる西原村リボンネットワークの終了時モニタリングを実施しました。これまでの活動の振り返りのまとめのご報告を、近日中にホームページで公開予定です。

【熊本地震】『それでも人生は続く』—韓国の学生が書籍を出版

発売中！

Civic Force では昨夏、日本の東北と韓国の学生に向けて、熊本の被災地などで約1週間の研修プログラム「観光復興応援ボランティアツアー」*を開催しました。あれから約1年。日韓両国の学生たち交流は今も続いており、7人の韓国学生たちは、今年5月、韓国で書籍『それでも人生は続く』を出版しました。プログラムで訪れた熊本地震や九州北部豪雨の被災地の写真、そこで出会った人々の復興への思いや現地で感じたことをつづったフォトエッセイです。書籍は、韓国のテジョン（大田）広域市の本屋やインターネット上で販売されています。

◆ネット販売先

月間トマト http://tomatoin.com/app/product/view?md_id=product&code=72&page=1

ヨンブン文庫

<http://www.kyobobook.co.kr/product/detailViewKor.laf?mallGb=KOR&ejkGb=KOR&linkClass=&barcode=9788997494538>



『それでも人生は続く』

13,800 ウォン（1,367 円）
社団法人モーメント発行

* Civic Force 東日本大震災支援事業「夢を応援プロジェクト」と、熊本地震「NPO パートナー協働事業」のコラボレーション企画です。韓国で防災ネットワークの構築に取り組む「A-PAD KOREA」と協力しています

「可能性を広げてくれた基金に感謝」 ～「夢を応援プロジェクト」卒業生からのメッセージ



東日本大震災で被災した岩手・宮城・福島 3 県の学生をサポートする「夢を応援プロジェクト」。2011 年 9 月から1人あたり月額 3 万円の奨学金を支給しています。このたび、2018 年 3 月をもって奨学金の受給を終了した卒業生からメッセージが届きましたので、その一部をご紹介します。彼らの多くは、苦しい時期を乗り越え、春から社会人や大学院生などとして新たな一歩を踏み出しています。（編集の都合上、文章の一部は割愛・編集しています。年齢は 2018 年 4 月現在）

「海外インターンシップに参加しました」

—宮城県出身／22 歳

震災でたくさん苦しい思いをしましたが、奨学金のおかげで海外のインターンシップに参加し、起業や社会人としてのマナーなどを学ぶことができました。支援いただいた皆様には感謝の言葉しかありません。

4 月からはロボットをつくる会社で働いています。おもちゃを作ることが夢なので、その実現に向けてこれからもがんばっていきます。



「母子家庭の境遇を憎むことなどない」

—福島県出身／21 歳

5 年間支援いただいたおかげで、たくさんの良い思い出ができました。母子家庭で苦労もありましたが、基金のおかげで自分の境遇を憎むようなこともなく充実した学生生活を過ごせました。4 月から企業の事務職として働いていますが、私のように支援によって夢を叶えられる人が今後も増えていくことを願っています。

「看護師として地域医療に貢献したい」

—福島県出身／22 歳

3 月に大学を卒業し、4 月から障がい者支援の事業所で働いています。大学では幼稚園教諭、保育士、社会福祉士の資格を取り、現在、社会福祉士の合格発表を待っているところです。資格を生かして働き、今後は夢を応援基金の募金箱に少しずつ恩返しをしながら、後輩たちの夢を応援できる大人になりたいです。

「支援が 生きていく 力に！！」



—福島県出身／23 歳

震災当初から経済面・精神面でご支援いただいたことは、私の人生を形成していく上で大きな力となりました。前へ進む力は、生きる力になりました。おかげさまで、春から晴れて医療系の企業で営業職として働きます。今度は、私が恩返しをする番です。夢を追う人を応援できる立場になりたいです。

「その後も続く国際交流の機会に感謝！」

—岩手県出身／23 歳

2017 年夏、夢を応援プロジェクトの教育プログラムに参加しました。そのとき熊本で会った韓国の大学生との交流はとても素敵な体験でした。

そして、彼らとは先日、韓国旅行の際にもう一度再会することができました。

その場かぎりで終わらない関係が、国をまたいで続いていく機会をつくっていただき、ありがとうございました。



「募集要項のタイトルが未来を向くきっかけに」

—宮城県出身／22 歳

「20 年後の自分に手紙を出そう」。夢を応援基金の募集要項のお題を見たとき、衝撃が走りました。当時、震災で多くを失った私は、将来に不安しかなかったからです。でもそれをきっかけに将来について考え、震災を乗り越え笑っている自分を想像するようになりました。そして、奨学金を受けて7年。支援のおかげで未来を信じてがんばることができ、4月から客室乗務員として働いています。

「夢を応援プロジェクト」では、奨学生たちに「この1年で学んだこと」「チャレンジしたいこと」「7年を振り返って思うこと」「今、伝えたいこと」などのテーマで今年も作文を書いてもらいました。その一部をご紹介します。（編集の都合上、文章の一部は割愛・編集しています。学年は2018年5月現在）

「街は良い方向に向かっている」

大学4年／岩手県出身・秋田県在住

震災から7年が経過し、地元の陸前高田市は良い方向に動いています。災害公営住宅の建設が進み、小学校の校庭からは仮設住宅がなくなって子どもたちが活動できる場が増えています。集団移転で高台に家を再建して新しい生活を始めた人もいます。地元へ帰省するたびに新しいお店や道路がつくられているのを見ると安心します。今後は自分が地元の復興のために貢献できるか考えていきたいです。

「感謝の気持ちを伝えたい」

大学4年／宮城県出身・東京都在住

私たち家族は、あの震災が起こった日から本当に苦しい思いをしてきました。自営業の母の収入が3分の1に減って廃業に追い込まれ、母子家庭の生活は困窮しました。大学進学も不可能だと思いました。そんなとき、御社の奨学金が私に手を差し伸べてくれました。諦めていた心や生活をもう一度立て直すチャンス！と希望を届けてくれたのです。どれだけ感謝してもしきれません。

「福島の復興はまだ進んでいない」

大学4年／福島県出身・新潟県在住

福島の復興はまだ進んでいません。避難指示が解除される区域は増えていますが、故郷に帰還した人もこれから帰る人も多くはありません。商店も医療機関も学校も、住む環境が整っていない街に帰ることなどできないのが現実です。「賠償金をもらえていいね」などという人もいますが、自宅だけでなく、友人やコミュニティ、仕事や生活を失った人にとって賠償金は物理的な支援でしかありません。



「卒業論文は南相馬の将来」



大学4年／福島県出身・北海道在住

実家の酪農業を継ぐため、酪農大学で学んでいます。働く前に必要な知識を得ようと、農業簿記や危険物取扱免許、人工授精師などの資格取得に向けて勉強しています。農村計画論の研究室に所属し、南相馬市の復興についての卒論を書く予定です。南相馬にはまだ除染されていない農地や除染されても使用されずに荒れ果てた農地がたくさんあります。南相馬に戻ったとき、一人の農業者として地域の課題を解決できるような論文を目指します。



「留学先で挑戦の日々」

大学4年／宮城県出身・アメリカ在住

2017年8月から大学の交換留学プログラムでサンフランシスコに留学しています。最初の頃は授業を理解するのに時間がかかり、授業を録音して寮に戻ってから何度も聴き直してノートに書きました。ディスカッションの授業では、アメリカの学生の活発さに圧倒されましたが、クラスメイトが私の言葉を汲み取ってくれたり日本について質問してくれ、少しずつ参加できるようになりました。初めての経験ばかりですが、これからも新しい挑戦をして自分を成長させたいです。



「復興についていけない人の存在」

大学4年／福島県出身・新潟県在住

社会福祉士になるための実習で地元の社会福祉協議会へ行きました。そこで見えてきたのは復興についていけない人の存在です。住宅の再建をしたくてもニュータウンの形成が未完成でできず、仮設住宅の取り壊しを前に別の仮設への引越を余儀なくされる高齢者もいました。災害復興公営住宅での課題も見えました。実習ではそうした問題を解決しようと力を注ぐ人がいて、私も将来、福祉の面から街の復興に携わりたいです。



「離れても忘れない」

大学 4 年 / 福島県出身・宮城県在住

放射線の影響で実家にいられず、今は宮城で生活し就職も宮城でと考えています。最近久しぶりに帰った実家はネズミの死骸や糞がたくさんあり、廃墟のようになっていましたが、やはり今まで暮らした家なので懐かしく感じました。

大学生になってからは地元や実家に帰る頻度は低くなり、疎遠になっていますが、たまに帰って地元の人に会ったりして、離れても忘れずにいたいと思います。



「『あの時以上のどん底はない』と思える」

大学 4 年 / 岩手県出身・東京都在住

7 年前の今頃、私は避難所で生活していました。おにぎりが 1 日 1 個、飲み物は 1 世帯 1 本だけ。風呂にも入れず、夜はぎゅうぎゅうの体育館で横になることもままなりません。その時のことを思い出すと少し胸が痛くなりますが、逆に今はくじけそうな時に「あの時以上のどん底はないんだ」と自分を奮い立たせています。これから就活が始まりますが、早く社会人になって今までのような方に助けていただいた恩返しをしたいです。



「震災を知らない子どもに会って」

大学 4 年 / 宮城県出身・在住

震災当時中学 2 年生だった私は大学 4 年生になりました。大学のフィールドワークで国連の SDGs（持続可能な開発）の目的と防災を結びつけて研究しています。その一環で地域の市民センターでイベントを開催したとき、「震災を知らない」という 6 歳の小学生に会い驚きました。そして、正しい防災の知識を身につけ、後世に伝えていこうと、「防災士」の資格を取りました。

将来は、避難所で助けてもらった区役所職員のような公務員を目指して公務員試験の勉強しています。



「故郷の存在を焼き付けた震災」

大学 4 年 / 岩手県出身・山梨県在住

震災とは何か、7 年経っても把握できません。でも震災は確実に故郷というものを強く焼き付けました。故郷は田舎で何も無い場所です。都会で生まれ育った友人たちの上品さをうらやまずにはいられません。でも、故郷の古い訛りや料理、青い海はとても懐かしく、旅行先の海に牡蠣やホタテの養殖いかなないと物足りなく感じます。

もし震災がなかったら故郷を嫌いなままだったかもしれませんが、今は地元のために何かしたいと思っています。



参加者
募集中！

【夢を応援プロジェクト】
夏休み宿泊研修「大分の子どもたちに会いに行こう！」

(九州北部豪雨被災地 ボランティアプログラム)

「夢を応援プロジェクト」では、今夏も東北の奨学生に向けたボランティアプログラムを実施します。昨年に続き、今年のプログラムの舞台は九州です。1 年前に豪雨で被災した大分県日田市の子どもたちと交流するプログラムです。現在、参加者（主に奨学生対象）を募集中！

(申込等詳細はホームページ参照)

■問い合わせ

yume@civic-force.org
シビックフォース（夢を応援プロジェクト事務局）

- 場所：大分県日田市小野地区周辺
- 日時：8/1（水）～8/6（月）5泊6日
- 応募締切：7/23（月）18:00



緊急 即応体制 を創る

大規模災害時の緊急即応体制を整えるためのさまざまな取り組みを行っています。メディア掲載やご協力いただいている皆様の関連情報もお知らせします。

緊急即
応体制

オズビジョンで講演

事務局長の根木佳織が4月26日、(株)オズビジョンで講演し、東日本大震災や熊本地震などでの災害支援の活動や企業・NPO・行政などが連携して支援に取り組む意義について話しました。



明治大学で講演

災害時の情報システムなどについて話し合う「絆シンポジウム」が6月17日に明治大学で開催され、パネリストとしてシビックフォース広報部の新海美保が登壇しました。

緊急即
応体制

気軽にできる社会貢献 「古本チャリティ募金」ほか

■ご不要の古本やDVDで寄付
本棚お助け隊「古本チャリティ募金」
<https://hondana.biz/second-hand-books-selling-for-charity/charity.html>

■たまったポイントで寄付
ECナビ「スマイルプロジェクト」
https://ecnavi.jp/smile_project/

■1日1回1クリックするだけ
PSC「クリック募金（東北支援）」
<http://www.psc-inc.co.jp/clickdonation/index.html>

■古本などの買取点数×10円
バリューブックス「ブックスフォージャパン」
<http://www.booksforjapan.jp/action/>

大阪北
部地震

レスキューチームが待機

6月18日の大阪北部の地震を受けて、Civic Forceは発災直後から被災状況の情報収集と関係者との協議を続けるとともに、救助犬を含むレスキュー隊がスタンバイしていましたが、今回は直接的な支援は見合わせております。今回お問い合わせをいただきました皆様に感謝申し上げます。

緊急即
応体制

1日33円から できることがあります

次の大規模災害に向け、平時から備えておくために、皆様の力が必要です。マンスリーサポーターとして、毎月定額（1000円単位）をご寄付いただく形で、大規模災害にともに備えてください。

■銀行：三井住友銀行 青山支店 普通 6953964

■ゆうちょ：00140-6-361805

（上記いずれも口座名義は「コウエキシャダンホウジンシビックフォース」です）

■クレジットカード：HP「オンライン募金」をクリックしてください。

https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation

※マンスリー・レポートおよびニュースレターのバックナンバーは、

<http://civic-force.org/news/monthly/> からご覧いただけます。





CIVIC FORCE